

## 映画『ハバナステーション』が大ヒット！

今、キューバで、映画『ハバナステーション』(Habanastation)が大ヒット中だと伝えられています。作品は、最近にしては珍しく、海外の映画会社との合作でなく、キューバ文化省、キューバ・ラジオ・テレビ庁(ICRT)、キューバ映画芸術・産業庁(ICAIC)の共同制作で、イアン・パドロン監督の初作品の長編劇映画です。ジャンルは、キューバ映画得意の社会派コメディです。

この映画は、7月の中旬に全国の300劇場で封切られて、わずか20日間で31万人以上が見たといわれています。また、つい1週間前、この映画は、米国の著名記録映画作家マイケル・ムーアが主催する米国のミシガン州のトラバース市映画祭に参加し、最優秀作品賞を獲得しました。上映会では、観客は大変感動して、スタンディング・オーベーションで作品を称えたと報道されています。8月30日にはマイアミでの上映が予定されています。

一体、何がキューバにおいて、米国において感動を呼んでいるのでしょうか。私は、未見ですが、伝えられているところを紹介しましょう。

ミルタ・イバーラ、マイケル・ムーア、パドロン監督→



映画初出演の二人の少年が、主人公役マジートとカルロスを演じます。二人は、小学校の同級生で大の仲良しです。学校では、同じ教室で授業を受け、同じ昼食を食べ、遊びます。



しかし、二人の家庭は、まったく違います。マジートの父は、人気ミュージシャンで外貨収入があり、裕福で、ミラマール地区という富裕層が住む住宅街に住んでいます。勉強好きで、甘ったれで、何不自由のない生活を送っています。カルロスは、貧困層が多い、マリアナーオ地区に住んでおり、父親は、犯罪を犯して服役中、貧しく、住居は汚く、不潔で、生活は厳しい。

ある日、マジートの父親が、ソニーのゲーム機「プレイステーション3」をマジートに買ってやる。キューバでは普通の家庭の子供は、とてももてない、羨望の品物だ。そこから、二人の間にいろいろな問題が起きてくる。映画は、現在のキューバ社会にあるエゴイズム、物質至上主義、別な面の寛容さ、無私の心、否定的な面と良い面の両面を、さまざまな角度から描写する。しかし、結局、二人は、友情とは何か、どれほど大切かということを理解するようになる。

かつて、80年代は、キューバの所得格差は、上位と下位それぞれ10%の差は、約4倍と言われていましたが、現在は10数倍となっています。賃金は、インフレにより購買力が、下がっており、生活の5分の1しかカバーできません。一方、外貨収入がある人びと(海外から送金を受ける人びと、ミュージシャンなどの外

貨収入がある芸能・スポーツ人、外国企業や観光関係で働く人びとなど)は、月100ドルもあれば、なんとか楽に生活ができます。



←パドロン監督と出演の子供たち

賃金だけで生活できない人びとは、目の色を変えて、あらゆる合法・非合法手段で不足分を稼ごうとします。そこに、ラウル議長が、8月の国会演説で指摘したような「二重モラル」が社会にはびこる原因があります。しかし、一面で、従来のキューバ人の良さ、連帯、協力、助けあい、素朴さを持っている人びともいます。キューバ人の友人たちと話していても、こうしたモラルの低下を嘆いています。と同時にそうでない人びともいることを付け加えます。映画はそうした複雑なキューバ社会の現状、社会格差を、リアルに、かつユーモラスに再現します。そこにキューバ国民が、一体感をもって感動する理由があるように思われます。

こうした社会格差の拡大を、多くのキューバ人は、困惑しつつも、経済の一層の開放を通じ、経済活動が活発に行われ、心にやましいところがなく、生活の不足分を稼ぐだけでなく、より良い生活ができるようになることを願っています。ラウルの改革が、こうした問題をどう解決していくかも課題だと、この映画は提起しているようです。

なお、監督は、原題を当初「プレイステイション(Pleisteichon)」とキューバ風に発音したものを考えていたそうですが、ソニーが受け入れず、Habanastationとなったものだそうです。

(2011年8月9日 新藤通弘)